

世田谷の中世城塞

「世田谷の中世城塞」と題する小冊子がある。昭和54年に東京・世田谷区教育委員会によって編集発行されたものである。標題のとおり、豪徳寺にあった世田谷城、九品仏にあった奥沢城をはじめとして、世田谷区とその周辺に散在する中世の城塞の跡から当時の様子を再現しようとするものである。

城といっても中世のそれである。草ぶきか、よくても松皮ぶきの館を土塁や堀でかこんだ程度のものであったという。土地開発がすすむ今日、そのあとをたどることも困難になっている。また、領主吉良氏にしても、足利氏につながる御一家衆として名門とはいえ、歴史にのこる大活躍をした人物をだしているわけではない。それに、これらの城が戦火にまわられたのも、確実なところで1～2回である。いづれにせよ、史書は多くを語っていない。現存する遺構・古文書などを手がかりに考証をする 他はない。

● 火箭をもちいて城内の建物に放火するという当時の攻撃パターンからして土塁の長さは今日遺構として残っているものでは短かすぎる。これでは“この”地点まで敵がくれば数時間で落城してしまう。これにもとづいて、かつて土塁であったとおもわれる所を推定する。近隣の城塞にくらべて不自然に大きすぎないか？ 地図の上で縄張りを重ねてみる。1m間隔に兵を配置しそれに予備を加えて必要な兵力を計算する。これだけの動員能力はあっただろうか？ 吉良氏の武将格のもの数、その平均兵力などを推定して、これとつきあわせる。

● 車懸りの法といって、騎馬武者を敵前で時計方向に駆けめぐらせながら矢を射かける攻撃パターンがある。そうだとすれば城側にこれを防ぐ手だてがなくてはならない。地図の上に図をかくてシミュレートしてみる。したがって防衛線の位置は候補になったいくつかの仮説のうち、“ここで”あったはずだ。

● 抜穴の伝説がある。事実、ようやく人が這える程の穴はあったらしい。しかし 出口の 位置がおかし

い。そんな所に出たら、たちまち敵兵に見つかってしまう。城で穴といえば、すぐに脱出口と思うのは誰もが陥りやすい考えだ。それではこの穴は何か？ 古い地図と古老の話から、かつてこの“抜穴”とはほとんど平行に細い流れがあったことを発見する。このことから、“抜穴”が実は人工の地上水路で、土塁群の間にある谷を水壕とするためのものであり、乾燥時の防禦施設として大切な役割をはたしたという、とりあえず矛盾のない説明をあたえる。

このほか、OR屋にとって興味のつきない大胆な推論とその検証の試みが数多くみられる。一読をお勧めする。とにかく、郷土史といえば好事家の御都合主義的なあて推量や、お国自慢・先祖自慢の類いでまともに相手にできないものと考えられるむきもあろうが、このレポートに関するすかざりそのにおいがなく、少なくとも、論議は実証的であり、記述は論理的である。

最初に、推測の根拠となる、当時の地政上、戦略・戦術上の事柄、武器の性能、戦闘のパターン、湿度で騎馬武者の通行可能ルートがごく限られた当時の世田谷一帯の地勢等が一括して列挙されている。これにひきつづいて、推論、検証等がそれに至る経緯のなかで、それとわかるように述べられており、仮に誤った結論に導かれていたとしても、その原因はただちにわかる。もとより、日本史や用兵術にかんする専門知識をもたぬ筆者が個々の議論の可否を論評することはできないが、少なくとも、文脈のなかでは十分納得できた。

執筆者の三田義春氏は世田谷郷土資料館・郷土資料編集委員であるが、歴史の城郭研究の専門家ではないという。むしろ、旧軍人としての実戦体験、卓抜した地図解読力、現場の地理の明るさ等を武器として、一貫した実証科学的態度で調査・研究を進めておられる。いわば、アマチュアである。よい仕事をされたと敬服している。

(からくり堂主人)